

AA19970022J/

1997. 5. 21 朝日新聞

大学入試から 英語はずそう

入試から英語をはずすことも考えてみては——。大学入試の改善策を論議している中央教育審議会（文相の諮問機関）は、選抜方法の多様化に向けて、定員の一部を対象に英語を入試科目からはすすことも選択肢として促す提言を答申に盛り込む方針を固めた。「実社会では役にたたない受験英語が英語嫌いを生んでいる」との批判にこたえる形で、試験の代わりに英語検定を活用することなどを提唱する。ほとんどの大学が入試で英語を課している「常識」に、提言が風穴を開けることになるかどうか。

これまでに固まった答申案では、中、高校の英語教育でコミュニケーション能力を育てる改善が進められているとして、入試でも改善が必要だと強調。いまの英語の出題を「文法や構文等に重きが置かれていることなどにより、高校以下の英語教育の改善を阻害している一つの要因になっている」との指摘もある」としている。

そのうえで答申案は「他の科目と比べ、必須（ひつす）科目とされることが多いが、（英語を

も活用など英検へ言提審教中

高校で学んでいることを受験の条件にする（履修科目等指定制や英語検定の活用などを進める一方、入学定員の一部で英語を課さないことも柔軟に考えてよい」と結論づけている。二十一日の第一小委員会で詰め議論をする。

入試改革は中教審の第一小委で議論されてきた。一部の委員が「読解力中心の受験英語は入試が終わると忘れ去られる。子どもの英語嫌いを生み、英語でコミュニケーションできない日本人を増やしている。英語の試験はなくてもよい」と強く主張。「英検二級程度を高校時代にとってもらうことなどで代用できる」という考えも出された。

これに対し「入試からはすす授業で勉強しなくなる」「受験英語が悪いのに、英語そのものが不要ないと誤解される」などの反対論も出た。結局、「選抜方法の多様化」という中教審全体の方針にも合致するため、答申案では高校以下の英語教育の改善が進んでいる延長線の問題として取り上げ、入試改革のひとつの方法として触れることにした。